

二月堂竹送り 山城松明講社



皆さんは、奈良東大寺二月堂で行われる「お水取り」を知っていますか。歴史に詳しいひとは、「修二会（しゅにえ）」という名前と呼んでいる人もいるかもしれません。お水取りとは、正式名称を「十一面悔過（じゅういちめんけか）」といい、旧暦で二月に行われる東大寺二月堂の行の事です。お水取りを見た人は、誰もがあの二月堂の舞台をかけ抜ける松明（たいまつ）の炎にみりょうされます。おごそかでありながら、とても豪快な灯火。あの灯火は、ほんとうは中で達陀（だったん）の行を行っている僧侶のための明かりとりだったのですが、時代が経つにつれて、民衆からは修二会の代名詞としても呼ばれるようになりました。近畿地方では、古くから「お水取りが終わると春が訪れる。」と言われ、親しまれてきました。もちろん、私たちの住む京田辺市の人々も、昔からいろいろななかたちでお水取りとかかわってきたのです。

昔、山城地方などの地域では、送り竹の風習というものがありました。お水取りの行が近づくと奈良に通じる街道筋に良い竹を置いておくと、村人や旅人、信者達によって、二月堂までリレーのバトンのように運ばれていったのです。奈良にもこの言い伝えは残っていて、東大寺で必要なものは、どんな馬よりも早く届くと有名でした。しかし、いつのまにかこうした風習は忘れられてしまいました。

竹をみんなが送っていけなくなっても、修二会はずっと続けないといけないものですから、東大寺では竹を探すのにとても苦労されたと聞いています。お水取りの松明に使われるのは、真竹（まだけ）という竹です。それも、ある程度の太さがあって、まっすぐでなければなりません。竹やぶに入ってみるとわかるのですが、あんまりそういうきれいな竹はありません。竹やぶをひとつ、ふたつ。みっつぐらい念入りに回ってみて、やっと1本見つかるようなものです。さらに、昭和53年ごろ、60年に一度広がるという花枯病という病気で、近畿地方の真竹はほとんどなくなってしまいました。



そんなある日のこと。お水取りの写真を撮るのが好きだったある人が、ひょんなことから近くの藪に適度な太さの「真竹」が出ている、という話を聞き、行ってみるとまたこれが良い竹で、そんなら一度持ち主に聞いてみよう、としたところ、どうぞどうぞと快諾を頂き、あれよあれよという間に自分で竹を掘って東大寺に寄進することになりました。この人は、とても根性がある人ですから、「男は一度やると決めたらやらんといかん。」と古い竹送りの風習を復活させることにしたのです。ただし、昔みたいにリレーで運ぶわけには行きませんから、その人は、たくさんの仲間を集め、かわりに自分たちで運ぶことにしました。その人の名前は、松村 茂といい、京田辺の竹送りを行っている「山城松明講社」の講社長です。

二月堂竹送りは毎年2月11日に行います。令和3年は、コロナ対策のために講社員のみで運びます。来年は、地域と地域をつなぐ竹送りに、みなさんも参加してみてくださいね。

